

暑さもようやく落ち着き、朝夕には秋の気配を感じられるようになってきました。

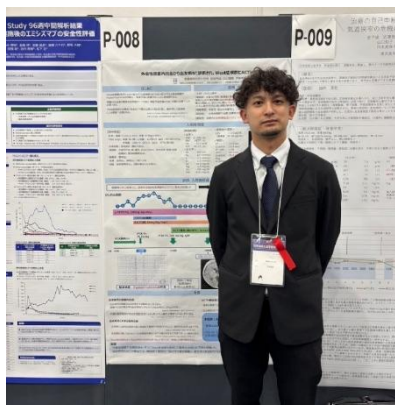
7月・8月は夏休み期間ということで「小児科通信」もお休みをいただいております。少し間が空いてしまいましたが、その間にリフレッシュされた方も多いのではないのでしょうか。9月からはまた新たな気持ちで通信を再開いたします。

今回の小児科通信では、小児科病棟の行事、医局員の先生方の学会参加報告などを掲載しています。ぜひ、ご覧になってください。

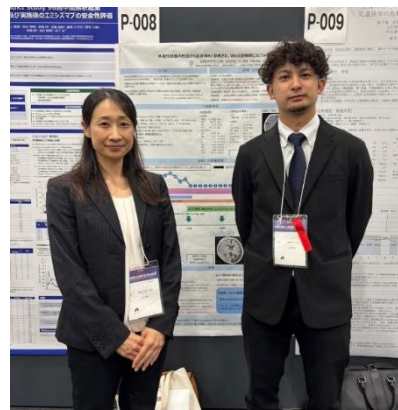
～6月から8月の医局行事報告～

6月 第47回日本血栓止血学会（ウインクあいち）

4年目の宮地秀途先生と白山理恵先生が発表されました。



血友病も、
それ以外の疾患も
幅広く勉強中！



7月 脳神経外科 長坂昌平先生によるクリニカル・カンファレンス

「北九州市における位置的頭蓋変形と頭蓋骨縫合早期癒合症の治療～頭のかたち外来開設から現在までの取り組み～」というテーマで講演が行われました。

長坂先生は、2024年6月に北九州市初の「赤ちゃんの頭のかたち外来」を開設し、約100名の患児を診察されました。そのうち頭蓋骨縫合早期癒合症は3例で、1例に対して内視鏡的支援下縫合切除術＋ヘルメット治療を施行されています。頭蓋骨縫合早期癒合症は生後6ヶ月までに介入が必要です。早期診断のためには、地域の小児科の先生方に「赤ちゃんの頭のかたち外来」を知っていただきたいと、ご講演いただきました。

7月 血液腫瘍グループのセミナー

「見逃してはいけない oncologic emergency」というテーマでセミナーが行われました。

Oncologic emergency は、がんに伴う緊急事態であり、早期対応が生命予後や神経予後を大きく左右します。腫瘍に伴う脊髄圧迫および Hyperleukocytosis による頭蓋内出血という二つの実症例を通じ、腫瘍性疾患を鑑別に挙げるべき初期症状と、早期治療介入の重要性を勉強しました。

～小児科病棟でのイベント～

7月 小児科病棟の七夕祭り

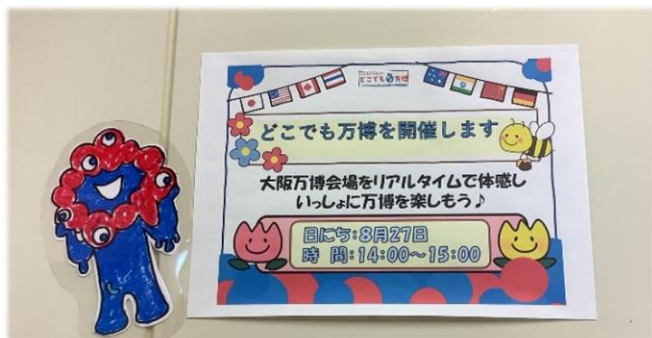
小児科病棟で七夕祭りが開催されました。七夕にちなんだ劇をみたり、歌をみんなで歌ったり、ゲームをしたりと楽しみました。

また、今年も栄養部の方々が、がんばってくれました！色鮮やかなデザートに大盛り上がりの子どもたちでした！いつもありがとうございます。



8月 「どこでも万博」開催

「どこでも万博」は、病気などの事情で大阪・関西万博まで出かけるのが難しいという子どもたちがロボットを介して万博を遠隔で体験する催しで、北九州市の特別支援学校や病院などで行われました。子どもたちは、不思議そうにテレビの奥の世界を見入っていました。



～9月10月の医局内イベント～

学生さんの中には、小児科通信を読んで学会参加してくれた方もいらっしゃいます！興味のある方は、ご連絡をお待ちしております★

- 9月 八幡地区病院小児科合同カンファレンス テーマ「百日咳」
- 10月 論文報告会
- 10月 神経グループの小児科セミナー

★クリニカルカンファレンスとセミナーはZoom参加出来ます。参加してみたい方は、守田 (h-rita@med.uoeh-u.ac.jp) までご連絡ください。

～9・10月開催予定の学会～

- 9月13日 第530回小児科学会福岡地方会（九州大学医学部百年講堂）
○大濱 尚先生 ○多久 佳祐先生
- 10月9日-11日 第53回日本臨床免疫学会総会（千葉・ホテルニューオータニ幕張）
伊藤 琢磨先生
- 10月10日-12日 第34回日本小児リウマチ学会総会（千葉・幕張メッセ国際会議場）
○小松 静野先生 伊藤 琢磨先生
- 10月10日-12日 第87回日本血液学会学術集会（神戸国際会議場など）
- 10月30日-11月1日 第58回日本小児内分泌学会学術集会（グランドニッコー東京ベイ舞浜）
○大濱 尚先生 ○桑村 真美先生 ○齋藤玲子先生

～論文掲載情報～

多くの論文がアクセプトされました！

1. 川村 卓、神田 里湖
助産師による母親への新生児スキンケア指導の影響：単施設ランダム化比較試験. 日小ア誌
2. Tsuguma Terukina, Shutaro Suga, Nao Ohama, Toshihiko Manabe, Hikaru Takahashi, Junpei Shibahara, Mayumi Kawase, Keisuke Taku, and Reiji Fukano.
Placental transfer of rituximab in extremely low birth weight infants: KREC as a tool for neonatal immune assessment. Pediatrics and Neonatology
3. Sirachainan N, Komvilaisak P, van Ommen CH, Revel-Vilk S, Ohga S, Zia A, Ochiai M, Takahashi D, Suga S, Labarque V, Amankwah EK, Souvanlasy B, Betensky M, Chan AK, Chuansumrit A, Goldenberg N.
International Perspectives on Vitamin K Deficiency Bleeding in Infants: A Cross-Sectional Questionnaire-Based Survey. Pediatr Blood Cancer
4. Ogata Y, Matsugaki R, Zaizen M, Muramatsu K, Matsuda S, Suga S, Saeki S
Nationwide Survey of Pulmonary Physical Rehabilitation for Neonatal Respiratory Distress Syndrome in Very-Low-Birth-Weight Infants in Japan. J Paediatr Child Health

～退職された先生～

8月31日をもちまして、米田先生がご退職されました。感染症のみならず、神経をはじめとする幅広いご知識で、これまで私たちを支えてくださいました。新天地でも、ますますご活躍されることを心より願っています。



～医局員からのメッセージ～

若手の先生方、学生の皆さん、こんにちは。医師8年目、小児科医6年目の宮本です。専門は小児血液腫瘍です。今回は、私がこの分野を専門に選んだ理由と、その魅力についてお話したいと思います。

産業医科大学小児科は通常、血液・腫瘍を扱う「A チーム」、感染症や神経、内分泌などを担当する「B チーム」、そしてNICUに分かれています。私は医師3年目で大学に戻ってきてすぐにA チームに配属されました。右も左もわからない状態でしたが、治療に耐える子どもたちの姿に、私自身が励まされる日々でした。

小児血液腫瘍分野は、時に厳しい現実と直面し、数か月から1年以上にわたる長期的な治療が必要になります。しかし、大変な治療の合間に見せてくれる子どもたちの笑顔や、長期間こどもたちを見守る中で成長を間近で見守れることが、この分野の一番の魅力だと感じています。

「白血病」と聞くと、大変な病気という印象を抱くかもしれませんが、しかし、たとえば小児急性リンパ性白血病（ALL）の治療成績は年々向上しており、現在では90%以上の患者さんが治癒できるようになりました。また、分子標的薬やCAR-T療法のような免疫療法など、新しい治療法が次々と開発されています。さらに、遺伝子パネル検査も日常診療に導入されてきており、学術的にも非常に興味深い分野です。

私が小児血液腫瘍医を選んだのは、子どもたちの成長を間近で見守れること、そしてこの分野が持つ未来への大きな「伸びしろ」に惹かれたからです。

どの専門分野に進むにしても、ご自身なりの理由を見つけてください。そして、もしこの投稿を読んで小児血液腫瘍に少しでも興味を持った方がいらっしゃれば、ぜひ一緒に診療できることを楽しみにしています。何かあれば、いつでも気軽に聞いてくださいね。

小児科通信に関してご意見や感想があれば守田
(h-rita@med.uoeh-u.ac.jp) までご連絡ください。 ～次号もお楽しみに～